
幻想郷温泉譚

ミナクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷温泉譚

【Nコード】

N8174F

【作者名】

ミナクア

【あらすじ】

初春のまだ寒い時期、博霊神社の裏に温泉が湧き出した！そんなと当然集まってくるのはあれやこれや……。あれやこれやの、あれやこれやな話です。

第一話（前書き）

東方シリーズの二次です。

第一話

幻想郷の山深く位置し、人里からも遠く離れた博霊神社。初春のクリアな夜の月が神社を照らし出し、まるで作り物のよう。そこへ向かうひとつの影……。何者だろう？よく目を凝らして見てみよう。
・夜に溶け込むような黒い衣装にとんがり帽子をかぶった少女が歩いているのだとわかる。月が出ていなかったら、時々ちらりと見えるズロースの白さしかわからないくらい真っ黒な服だ。その少女が月明かりに影を延ばし、独り悪態をつきながら博霊神社に向かっている。どんなことを言っているんだろう？耳を澄ませてよく聞いてみよう。幸いにして冷たく澄み切った空気なのでどんな小さい声も聞こえるというもの。

少女：「くそう・・・寒い、寒い〜し遠いぜ。遠いし寒みい〜ぜ。あいつの住処はなんでこんな遠いんだ？『誰も参拝してくれない』だって？当たり前だぜ。遠すぎるんだよな」

その様子を見る。若干猫背で両肩を抱えるようにして震えながら独り言を言っている。見るからに寒そうだ。その他にも、チルノのせいで寒いのか？などと訳のわからないことをつぶやいている。その悪態に対して

??：「不便で悪かったわね」

と答える声がひとつ。黒い服の少女は、霊夢と呟き声のほうを見る。そこには腕を組んですねたような顔をしている巫女服を着た少女がたっている。

霊夢：「仕方ないじゃない。うちの神社は幻想郷と外界の境目の役

割があるんだから。そんなのが幻想郷のど真ん中にあっつていい訳ないでしょ。私だつてもつと賑やかなところにあればいいって思うわよ。里にいる人たちから『妖怪神社』なんていわれていい気分になるわけないでしょ？夜は寂しいしさ、お賽銭も少ないし。・・・ああ、自分で言つててなんてところにすんでるのかしらとか思っっちゃったわ。」

ううつ、と呻き、がつくりと膝をおとし、orz状態になる。この少女、自分の棲んでいる場所があまりに不便なのを気にしているようだ。

第一話（後書き）

良かったら感想などお願いします。

第二話

魔理沙：「わざわざ出迎えご苦労だぜ、霊夢。いきなり声をかけられてちよつとびっくりだけどな」はっははと少女は笑う。さっきまでぶつぶつと悪態をついていたのに今度はすっかり上機嫌になっている。

霊夢：「魔理沙。あんた箒に乗ってくれば遠くないでしょ？なんでわざわざ歩いてくるのよ？飾りじゃないのよ箒は」若干古い80年代アイドルネタをさりげなく振ってみるがもちろんのこと魔理沙にはわからない。そんなネタ幻想郷でわかるのは誰もいないだろう。

魔理沙：「箒だと空だぜ。空だと寒いんだぜ。歩いたほうがいいんだよ。ま、歩いてても寒かったけどな」と魔女らしくないことを言い出す。なんでそんなことも理解できないんだ？というような口ぶりだ。

霊夢：「はあ。道理で来るのが遅いと思ったわ。私も寒いのに外で待ってたんだからね。」

腰に両手をあてて怒ったように霊夢は言う。白と赤の巫女服を月の夜に浮かび上がらせている。

それを見て月夜と巫女の組み合わせはやばいだろと魔理沙は思う。清浄な月と清浄な巫女。なんとも日本的な風景じゃないか。あれ？霊夢は清浄な巫女なのか？処女おとめなのか？

魔理沙：「なあ、霊夢」真剣な顔になって魔理沙は言う。

神妙な顔で聞く魔理沙にいつもと違う雰囲気を感じた。

霊夢：「何？」

魔理沙：「お前は清浄な巫女か？」

がくつ。こつちの心構えと魔理沙の発した言葉の落差のひどいこと
ひどいこと。

霊夢：「いきなり何を聞くのよっ！このセクハラ魔女っ！」と思わ
ず頭をはたく。

魔理沙：「いててて・・・私は悪くないぜ。月と霊夢のせいだぜ」

霊夢：「また訳のわからないことを・・・」

といて頭を抱える。

それを言うなら月と魔理沙のような魔女との組み合わせのほうもや
ばいし、いかにも西洋的な風景なのだが自分の事は棚に上げる性分
のようだ。

第三話

霊夢：「そんなこと聞かなくてもいいじゃない！もっとも、私はまだ未開封の乙女だから。」

ご心配なく・・・それより早く行きましょよ。何が楽しくてわざわざ寒い中こんな話をしなくちゃいけないのよ？「そう言ってぶるつと震えた。」

魔理沙：「悪い悪い。何も楽しくないがなんとなく聞きたくなつてさ。月のせいだぜ。・・・しかしだぜ、その格好じゃ特に二の腕が寒いだろうな。私が暖めてやるぜ」そういつて霊夢に抱きつこうとする。月に浮かぶ白い二の腕に欲情したかのようにだ。

霊夢：「ちよつと！よだれでてるから！そんなのついたら風が吹いたらそこだけ冷たくなるでしょ。ていうか暖めるんじゃないって抱きつきたいだけでしょ。あんたの場合は。」そういつて近づく魔理沙を振り払う

魔理沙：「でも寒そうだぜ」と残念そうに呟く。

霊夢：「ご心配なく。今日は厳冬仕様にしてるから心配ないわ。袖のところがふかふかの毛布だし。ほら。」そういつて腕を差し出して、ほれほれ、触ってみ、という風に動かす。

魔理沙：「（近づいて触ってみる）・・・本当だ。ふわふわだな。つていうかそんなバージョンもあったのか。まあいいや。ところでさ、何か用があるのかよ？わざわざ呼び出してよ。この寒い中わざわざ来てやったんだぜ。つまらない用事なら弾幕ばら撒くぜ？これだけ寒いと当たったら痛いだけじゃないぜ」

霊夢：「うふふふ。実はね、このふわふわな袖を自慢したかったのよ」

魔理沙：「……マスタースパーク……」そういつて弾幕の準備に入ろうとする。

それを見てあわてて霊夢は手を振る

霊夢：「冗談よ、冗談。実はね、神社の裏に温泉が湧き出したのよ。それで一緒に入らないかなって思って弾幕を呼んだのよ」

魔理沙は構えを取りやめてうれしそうに言う。

魔理沙：「おおおっ、なんだあゝ。先にそれを言ってくれよっ。

弾幕の代わりに感謝の言葉をばら撒くぜ。それにわかってたら酒だつて持ってきたのに」

霊夢：「お酒ならご覧の通り」

そういつて白い小瓶を人差し指と親指でもって軽く振り振りする。ふりふりふりふり。そのたびにたぶたぶたぶと音がする。魔理沙の目はその白い小瓶に釘付けた。猫が猫じゃらしを目で追い続けるようにふりふりを見つめ続ける。

魔理沙：「なんだよ、そんなもの持って来て……もう飲んでるのか？」「ぐくり、とのを鳴らす。

第四話

霊夢：「ううん。もうちょっと遅かったら飲んで体を温めようと思っ
っていたところよ」

魔理沙：「あぶねえ〜。家を早めに出て良かったぜ。「そういつて
安堵のため息を漏らす。

霊夢：「そんなに先に飲まれるのが嫌なの」

魔理沙：「そりゃそうだぜ。一緒に酔っていくっていうのも酒宴の
醍醐味だろ。先にやってるよ〜なんていわれたらがっかりだぜ。そ
の上もう酒がなくなったりしたら・・・」

霊夢：「心配しなくてもお酒はたくさんあるわよ。お祭り用にとっ
ておいたのもあるし、こっそりと作ってるのもあるから。それが超
美味しいから。」

魔理沙：「それは楽しみだぜ」

霊夢：「温泉につかりながら魔理沙と一緒に飲みたいなと思っ
てね。もちろん悪酔いしない程度に。魔理沙、酔っ払ったらいやしくな
るからねえ。悪酔いしないって約束してくれる？」

魔理沙：「そんなこと言われても実際に飲んでみないとわからない
ぜ。いい酒ならいい感じに酔えるけどな。まあ悪酔いしたらしたで、
未開封の巫女さんの可愛い裸体をたっぷり堪能させてもらっぜ」「ま
るでエロ親父のような発言をする。

霊夢：「やっぱり魔理沙と入るのはやめます。お酒も飲ませません」そういつて拗ねて見せる。

魔理沙：「嘘嘘。嘘だぜ。悪酔いしないぜ。ただ、酔うと人肌恋しなくなるだけだぜ

べたべたはするかもしれないぜ。そのくらいならいいだろ。あと風呂上りに宴会をやりたくなるくらいだぜ？いいだろ？」

霊夢：「しかたないな」とため息交じりに答える。

そんな霊夢の背中をドンと叩いてうれしそうに

魔理沙：「やっぱお前いい奴だな。行こう。善は急げってやつだ」
などと言っ。

第四話（後書き）

魔理沙がだんだんエロ親父化してきちゃいました・・・

第五話

霊夢：「なんて調子のいい・・・ちよつ。そんなに押さないですよ」

と前を向いたまま、首だけを魔理沙のほうへひねり文句を言う。

魔理沙：「なに言ってるんだよ。霊夢が歩くのが遅いんだろ。早く行くこつぜ。ほらほら」

そう言っつて両手で霊夢の背中を押していく。

霊夢：「そんなにあわてなくても大丈夫だから。仕方がない魔理沙」

魔理沙：「何とも言ってくれ。私はお前みたいなのんびり屋じゃないぜ。無限の時間があるわけじゃないんだから。特に私たち人間はな」

(階段を登つて神社に到着。 霊夢が棲む家の縁側へ歩きながら会話を
をする)

魔理沙：「夜の神社はいいもんだな」といいながら白い息を吐く。

階段を登つたため体は温かくなり、少しは気持ちに余裕が出てきた。

霊夢：「そうでもないわよ。一人で寝てる時なんかすごく寂しくなるしね」

魔理沙：「そうだろうなあ。」「そう言っつて魔理沙はぐるつと境内を見回す。確かにさみしくなるだろうなあ。」

霊夢：「夜なんか寝てると風が冷たいし、裏山の森のざわめきが胸を締め付けるし、障子越しに部屋に降り注ぐ月の明りなんか見てるとほのかな色味が不思議な感じで本当に私の部屋なのかしらなんて思ったりするしね。衣擦れの音も自分のじゃないみたいない感じになるのよ。幻想郷にいるのもっと幻想的な場所にいるかのようにね」

魔理沙：「なんだか詩人みたいだな」くくくつと笑ってからかう。

霊夢：「そうでもないわよ。私は賑やかな方が好き。暖房で暖かい風が吹いて、裏山からは参拝客のざわめきが聞こえて、障子越しにはお賽銭を投げ入れる音が聞こえて本当に博霊神社なのかしらと不思議に思いたいわよ。」

魔理沙：「いきなり俗っぽくなったな。」そう言って苦笑いをする。

霊夢：「そんなことないわよっ（ちょっと顔を赤らめる）たくさんの人に参拝して欲しいだけなの」

魔理沙はちよつと空を仰ぎ見る。そして言う。

魔理沙：「そういうことにしとくか。ま、私は静かな神社も好きだぜ。夜歩いても怒られないしな」

霊夢：「夜の神社で怒られたりしたの？」

魔理沙：「外の世界にいたときはな。勝手に入るなとか危ないとか言われてな。あのころか

らこつちの世界に興味があつたんだろうな。私のことはどうでもいいぜ。で、どこにあるんだ？その温泉って言うのは？」

霊夢：「こつちよ」二人はいつもお茶を飲む縁側に到着する。昼間とはまた違う幽玄な雰囲気漂っている。それもこれも月の光のなせる業か。

縁側から上がりこんで、神社の裏手に二人は向かう。裏手の森を十分ほど歩く。

第六話

霊夢：「ちょっと暗いから気をつけてね。たまに幽霊がでるから」
神社の裏手を歩きながら霊夢は言った。

魔理沙：「私は平気だぜ。怖いのか」

霊夢：「怖いに決まってるでしょ。私が幽霊とかお化けが苦手なの知ってるでしょ」そういつておびえている姿がかわいそうで忍びないと魔理沙は思う

魔理沙：「巫女さんなのになんで怖いかなあ。しょっちゅう幻想郷の異変を解決しに出かけてるくせによ。ほら、手え握ってやるよ。これで安心だろ」暖かい霊夢の手は魔理沙の手を握りかえしてくる。

霊夢：「うん。良かった。たまには役に立つのね。こういうとき心強いわ」

魔理沙：「たまにはは余計だぜ。いつも飲み食いさせてもらってるしな。役立つところを見せておかないとただのごく漬しとおもわれかねない。・・・まだか？熱々で、ひたひたで、湯気が濛々（もうもう）の中でくいつ、といきたいぜ。怖い怖いって考えるんじゃないから、こういうことを考えてれば怖くないから」

そんなこと考える余裕があったら手なんて握ってもらわないでもいいのにも思ったがその辺は肯定しておく。

霊夢：「そうね。・・・はいっ到着」

魔理沙：「おおっ~~~~ここかあ~~~~」魔理沙は霊夢の2、3歩前

まで歩いてしつかりと見ようと手をかざした

真つ暗な森から月明かりが照らす拓けた場所へでた。そこはきちんと岩でぐるっと囲まれ、レイアウトはまさしくちゃんとした温泉となっている。周りは森に囲まれている。湯気が濛々と立ち上がり、すでに盆の上に載ったお酒が浮かんでいる。

第七話

魔理沙：「すごいなあ。霊夢。思った以上にすごい。これって何十人も入れそうだな」

そうやって素直に感嘆の声を漏らす魔理沙の様子を見て霊夢はうれしそうに言った。

霊夢：「そうでしょ。ちゃんとここまではするのは大変だったんだから。手伝ってもらったりしてね。あ、体をふくタオルとかはもう用意しているから。あとは入るだけね。服とかは畳んでこのかごの中に入れたら良いから。あとはほら、あの月でも眺めながらゆっくり漬かりましょ」

魔理沙：「そうだな。んじゃ早速はいるぜ。」魔理沙はお酒を飲みたいという欲求と早く暖かい湯に漬かって温まりたいという気持ちを抑えることができずにそう言った。

そして魔理沙は帽子を脱ぎ、服も脱ぎ始める。着ていた服は魔女の服らしくてごてごてとしたボリュウムのある感じだったが、服を脱ぐとそこにはすらっとした体が隠されていた。魔理沙はあっという間にすっぽんぽんになってなぜかラジオ体操じみた動きさえ始めている。やはり服を着ているとちよっとは体が重たいんだろう。鉄の下駄を脱ぎ、鉄のリストバンドをはずしたどこぞの番長か、背中の甲羅をはずした亀仙人のように身軽になったようだ。

魔理沙：「よし、準備完了つと。やっぱ裸だと寒いな。霊夢も早く脱ぎなよ。そんで早く入ろうぜ」そういつてかごの中に服を畳んで入れた。それから少しでも寒さを和らげるかのようにタオルを肩にかける。

あまりの脱ぎっぷりの良さに霊夢は驚く

霊夢：「ちよつとあんたね。そりゃ誰も見てないかもしれないけど、ちよつとは恥じらいつて言うか一応私たちも女の子だから・・・」

魔理沙：「あゝはいはい、言いたいことはわかるぜ。女の子らしくしろってことだろ？よく言われるから全部言わなくてもわかるから。そりゃ私だつて出るところに出たら女の子らしくするぜ？」両手を組んで背伸びをしながら魔理沙は言った。

霊夢：「本当かなあ？」

腰を捻り、両手両足をぶらぶらと動かす。まるでプールに入る前の柔軟体操のようだ。

魔理沙：「嘘じゃないぜ。でもここには霊夢しかいないんだぜ。なんで恥じらう必要があるんだ？早く霊夢も脱いで脱いで。あ、私が脱がせてやるぜ。ほれほれっ」

そう言つて裸のまま霊夢の服を脱がそうとする。でも脱がすというより、くすぐるうつとしている感じだ。

魔理沙が触るところがごとごとく霊夢の敏感なところばかりなので、霊夢はじたばたする。

霊夢：「いやっ、やめてえっ・・・自分で、自分で脱ぐから・・・そこは関係ないでしょっ！

もおっ、なにどさくさに紛れて触ってるのよっ。そこ違つっ、違つから・・・くすぐりたい、あはははははは・・・ちよつと・・・あははははあ・・・やめて・・・もっっ、やめてよっ！」あまりにくすぐつたくて足の力が抜けてしまった上に、立ったままだと魔理沙が手を止めないので魔理沙の手を避けるために霊夢はその場を思わずへたり込んでしまった。それでも魔理沙は調子に乗っているん

なところを触ったりする。霊夢が笑えば笑うほど、ちよつかいを出したくなってしまふようだ。まさに外道！

魔理沙：「なぐに真つ赤になってるんだよ。冗談だぜ。冗談。意外と霊夢されるがままだったな。」最後は霊夢が大きな声を出したのを聞いて、これ以上やったら怒り出すかも知れないと思い、とりあえず霊夢をくすぐる手を止めた。

霊夢はまた魔理沙が何かしてくるんじゃないかと警戒をしながら魔理沙を見上げて言う。

霊夢：「もおっ……。はあはあ……。笑いすぎて……。おしっこ漏れそうだったじゃない。」

霊夢が怒ってないのが分かって魔理沙は満足げに笑って、からかうような口調で言った。

魔理沙：「汚いなあ。なんてこと言うんだよ。女の子は恥じらいがどうのこうのって言ってたのは誰だっけ？」などと言う。まさに外道！

霊夢：「あんたがいろんなところさわるからでしょ。もう。先に入っつていいから。自分で脱げるから」しっしっ、という風に魔理沙を追い払う。

第八話

魔理沙：「ちえっ。私は厄介者かよ」と悪態をつきつつ温泉に行く振りをする。それから直ぐに振り返って襲い掛かる振りをする

魔理沙：「やつぱり手伝う」そういつて両手を挙げて襲い掛かる様子を見せた。ゆっくりと

両手を挙げ、唸り声を上げながら近づく様子はさながらラクーンシテイから逃げ遅れて死肉をむさぼる屍の一味となり果てた哀れなる一般市民のようだ。

霊夢はまたしゃがみこんで、胸を押さえる。くすぐられるのが怖いのか、それともリビングゲッドな様が怖いのか、はたまた両方なのか。いや、さすがに両方は無いな。くすぐられるのが怖いに違い無い。

霊夢：「もういやっ。堪忍して〜」と半分泣きそうになっている。

そんな仕草に萌えつと来た魔理沙・オブ・リビングゲッドはすぐに魔理沙に戻って言った。

魔理沙：「悪い悪い。ちょっとやりすぎたぜ。先に入ってるぜ」と謝る。

霊夢：「本当に入ってよ。また来たりしないでよ。」
と言って信用していない様子だ。

魔理沙：「信用ないなあ」「ぐすん、と泣く真似をする。女の子らしい仕草をしたのだが

本当に女の子らしいのなら、まず最初に隠さなきゃいけないところを隠すだろう。それにゾンビの真似なんてしない。

霊夢：「信用なくすことするから悪いんだからね」

魔理沙はちえ、つと言って今度は振り返らずに温泉に向かう。何度か手をつけて湯加減を確かめた後、桶でお湯を体にかけてそれからゆっくりと湯に入る。気持ち熱めのお湯だが、それがいい。最初はちよつと熱いけど思い切つて肩まで漬かった。

魔理沙：「ふい〜」。こりゃいい湯だぜ。なんだか魔力も充実してきそうな気がするな。「そういつて空を見上げ、人差し指を天高く掲げる。その指からちよつと魔法を流出させる。魔理沙特有の星の形の魔法が出現する。しばらく指先で回したり、追いかけてこをさせたりして遊ぶ。

そのあと霊夢が入ってくる。

霊夢：「ちよつどいい湯加減ね。ちなみに当温泉の効能は、疲労回復、リユーマチ、魔法回復、それから美容効果などとなっております」などといいながら魔理沙の横に座った。

魔理沙：「ふ〜ん。参拝客が来ないようなら、温泉宿を開いたらいいかもしれないな。そつちのほうがお客さんがくるぜ」ぱつと星を消して鼻まで浸かる。

霊夢：「失礼な・・・つていたいけど魔理沙の言うとおりなのが悔しいわ」

魔理沙：「ははは。そんな時や毎日でも顔を出してやるぜ」

霊夢：「今だつて毎日来てるようなもんでしょ」「そうつて魔理沙に鉄砲水をぶつける。

魔理沙：「うわっ、畜生っ！目がツ！目があつつつ！！」目を押さえもだえる魔理沙を見て霊夢は慌てる。目にダメージを食らって痛がる迫真の様子は一瞬だけムス力を越えるかのような輝きを見せた。マリサ、ムスカ。カタカナにすると3文字であるところなんて瓜二つじゃないか。それ以外は似ていないが。

霊夢：「ちよっつ、大丈夫っ！」魔理沙の顔を覗きこむ。

魔理沙：「うっつ、霊夢が、霊夢がいじめるよお」魔理沙が目を覆っているので口しか見えない。霊夢はあわてて、大丈夫？と何度も言うが、その口元の形に気付く。

霊夢：「あれっ、笑ってない？」そういつて魔理沙の顔を覗き込む。

魔理沙：「笑ってない、笑ってないぜ。痛がつてる」そういいながらもその声は楽しそうに響く。

霊夢：「笑ってる〜」そう言つて目を覆っている魔理沙の手をつかみどけようとすする。

魔理沙：「痛いんだからっ・・・ぷっ、はははは、痛いよ〜、ははは、いたい〜〜やめろ〜」

ところえきれずに笑い出した。笑ってはいけない状況では逆に笑いが起こってしまうが魔理沙はその状態になっていたのだ！まあ「！」をつけるほどのことではないけど。

霊夢：「ほらあ、笑ってるじゃない」と魔理沙の顔を見て言う

魔理沙：「あ〜、ばれたか。驚いただろ？」にんまりとして言う。

ちよつとでも心配した霊夢の気持ちなどどこ吹く風。どうだ面白かっただろ？という感じた。魔理沙が人を楽しませるとき、それは相手を驚かせるという手をしばしば使う。

第九話

霊夢：「別に。全然驚いてないっすよ。自分、全然驚いてないっすから」それを知っている霊夢はついそういつてしまう。魔理沙の計算どおりに反応してしまうということが恥ずかしいというのか、悔しいというのか、とにかく素直に認めないのだ。魔理沙の手のひらの上で気持ちを自在に転がされるのは博霊の巫女としてのプライドが許さない。なんとも小さい、どうでもいいプライドだが。

魔理沙：「強情っぱりだなあ、つかキャラ変わってるよ！誰だよ！」そう突っ込みを入れて今度は魔理沙が鉄砲水を打ち返す。それをさらに打ち返す・・・そのちよつとしたキャツキャウフフがだんだんエスカレートして『打ち帰す』が『撃ち返す』になり裸のままポロリもある（最初からポロリだが）弾幕ごっこが始まる・・・なんてことはなく。いつしか二人は自然とお酒に手を伸ばす。お湯の上に浮かべたお盆にお酒を載せてそれをちよくちよくと飲む二人。

魔理沙：「まま、一杯。霊夢課長」

霊夢：「あ〜どうもどうも。魔理沙部長も。ささ。」と幻想境ぼくはないやり取りが始まる。

魔理沙：「とつとつとつ・・・ぐびぐびぐび・・・うひょ～～～っ！旨いつ！！・・・ふっ～～～・・・そういやさ、さっきの話。私毎日来すぎかな？あんまり来ないほうがいいか？うざい？」もちろん毎日のように顔を見るのがうれしい霊夢を知っているが、どの程度のものなのか知りたい。

霊夢：「大歓迎よ。それに魔理沙の成長を毎日見れるしね」くいつ

と杯をあける。

魔理沙：「成長？」

霊夢：「そう。魔理沙、自分ではわかっていないと思うけど、去年より、一昨年よりもずっと大人びてきてるっていうか、綺麗になってるのよ。」

魔理沙：「へえ。冗談きついで。」こういう風に誉められるのには慣れていないので上手くリアクションがとれず、そう返事するのが一杯一杯だ。

霊夢：「冗談なんかじゃないわよ。ここに取り出だしたりします2枚の写真」そういつてじゃん、と二枚の写真を出す。当然魔法で保護されているので湯当たりでへるへるになったりはしない。

霊夢：「これが一昨年の写真。それからこれが去年ね。どう？あ、まだあるわよ。」

魔理沙：「見せてみる・・・どれどれ・・・」写真は魔理沙が風呂場で服を脱いでいる写真。脱ぎ終わったあと、自分のスタイルをチェックしている様子。それからお風呂で気持ちよさそうに歌っている写真などだ。

魔理沙：「って、これなんでヌードなんだよっ！いつ撮ったんだよっ！」と顔を真っ赤にする

霊夢：「あら、文さんをお願いしてとってもらったのよ。ちょうど家に来るたびお風呂にはいつてたじゃない。それをとってもらったの。」

魔理沙：「ぐぬぬ・・・あのパラッチ天狗めえ・・・」

第九話（後書き）

なんかこれ書いてたら、自分もお酒を飲みたくなったので、この回は飲みながら書きました。
なのでちょっと脱線気味ですが、アリでしょ。

第十話

霊夢：「ほら、おとしと比べるとおっぱいなんか控えめながらも大きくなって・・・」「うっとりとしながら写真をみる霊夢。

魔理沙：「やめろお〜〜！」といいながら頬を両手で押さえ、真っ赤な顔になる魔理沙。RODのアニタが、ねねの家に住むためにあることないことかかれた日記を音読されたときのように顔を赤く染めた。

そんな魔理沙を見て霊夢は勝ち誇ったように言う。

霊夢：「なに照れてるのよ。誰にも見せないわよ。二人だけなら恥ずかしくないんでしょ？それに今も裸じゃない。」

魔理沙：「それとこれとは話は別だぜつ。まさか自分の裸を見せられるとは」そういつて真っ赤になっている。そして霊夢が手にする写真を奪い取るうとする。

霊夢：「そう簡単には渡せないわよ。そうやって照れてる魔理沙もかわいいわ・・・ま、これは私の宝物だから、誰にも見せないから心配しないでね。」

魔理沙：「それをネタに私を強請ったりしないか？」

霊夢：「何？お賽銭入れないとこの恥ずかしい写真をばら撒くぞ？つてやって欲しいの？」

魔理沙：「そんなわけあるかよ」

霊夢：「でもそれって呼水にしかないわよ。なるほどねえ。強請って見ようかしら」

魔理沙：「せこいゆすりだな！ていうか恥ずかしいなあ。もう仕舞ってくれよ」

霊夢：「どうしようかしら。そんなに恥ずかしい？」

魔理沙：「恥ずかしいぜ」と湯あたりをしたわけでもないのに真っ赤になっている。

確かに写真の魔理沙は大人っぽい体つきになってきている。それは成熟しつつあるということと魔理沙にとってはうれしいことなのだが。

霊夢：「でもさつき服を脱ぐときは散々虐められたもんねえ」

魔理沙：「悪かった、悪かったよ。私が悪かったぜ。謝るからそれを仕舞ってくれ」と今度は魔理沙が泣きそうな顔になっていった。

十分に先ほどの意趣返しを終えた霊夢はもう少し魔理沙を虐めたかったがそんな姿を見てちよっとかわいそうになったのその写真を籠に投げる。

霊夢：「とにかく、体もそうだけど、顔つきもちよっと大人びてきているの。そんな魔理沙の成長を見るのも私の楽しみなの。こうやって取り留めのない、どこにも行かない会話をするのも大好きなの。だから毎日でも来て欲しいくらいよ。」

真顔で言われて恥ずかしいながらもうれしい気分になる。

魔理沙：「ふ〜ん・・・じゃ、私と参拝客、どっちに神社に来て欲しい？」

霊夢：「参拝客。魔理沙も参拝客としてきたらいいんじゃない？お
賽銭忘れずにね」

魔理沙：「・・・」

第十一話

霊夢：「さあさあ、そんなことより飲みましょ」そう言って魔理沙の杯に酒を注ぐ。

魔理沙は、結局お賽銭が目当てかよ！と言いたかったが、そんなことを言うのも野暮りたいし、なによりも杯に注がれているお酒の香りに負けてしまった。

魔理沙：「なんか、いい感じの香りだな」そう言って魔理沙は注がれた杯に鼻を近づける。

くんくんするといいい香りがする。その上品な香りはお酒と言うよりもワインに近い感じすらする。さらにしっかりとにがりもどろりと浮かんでいる。どろり濃厚。ピーチ味？

霊夢：「さすがは魔理沙ね。これは特に熟成させたお酒よ。宴会でも滅多に出さないんだからね。」とウインクする。

魔理沙：「特別なんだ？」

霊夢：「そう。特別」

魔理沙：「そんな特別なものを飲ませてもらえる私は、特別な存在だと感じました。そして私はこのお酒をアリスにも飲ませます。なぜなら、彼女もまた特別な存在だからです」

霊夢：「どこかのアメ玉のCMみたいなの言うわね。ていうかアリスいないから。いいから心して飲みなさいよ」とうれいことを言う。そう言っつて自分の杯にも並々と注ぐ。

魔理沙は2、3杯そのお酒に舌鼓を打つ。

霊夢：「どう？」と魔理沙を覗き込みながら聞く。

魔理沙：「美味しい」そういつて空になつた杯を霊夢に差し出す。

お湯に漬かっているために血の巡りが良い。だからすぐにアルコールが血に乗って体中を駆け巡る。いつもならもう少しお酒が入ってきてからいい感じに酔ってくる魔理沙だが今宵は一味も二味も違わずで酔いで表情も緩み、自然と口元が笑みこぼれる。何か知らないが楽しくなつて来た。

魔理沙：「今日の私は一味も二味も違つぜよ」

霊夢：「何言つてるのよ。いつもと変わらないわよ」「そう言つて自分でお酒を注ぎ、くいっ、と飲む。

魔理沙：「そんなつれないこと言わないでよあ」
「とつて頭を霊夢の肩に乗せる。

霊夢：「あゝ、はいはい。ごめんなさいね。よしよし」
そう言つて軽くあしらいながら魔理沙の頭をなでる。宴会マスターだけに酔つ払いのあしらいは上手い。

魔理沙：「いい感じに酔つ払つてきたよ。霊夢」
「そう言つて体を落ち着きなく動かして霊夢に寄りかかちる。そしてそのまま首を左右にゆつくりと動かしたり、時折月を見たりする。（今宵の月はなんとはいえずすばらしいなあ）なんてことも思つたりする。

霊夢：「あゝもう、うつとうしいわね。でも出るところに出たら女らしくなるって言つてたけど、今は女らしい仕草になつてゐるわね。

まあ、酔っ払ってるだけなのかも知れないけど」

魔理沙：「そうかしら？普段から私、女の子らしいわよ。うふふ」と精一杯かわいく言ってみた。

霊夢：「うわっ。女の子らしい口調を使い慣れてない感がぶんぶんする話し方ね」

魔理沙：「そんなことございけませんことよお。ほほほほ」

霊夢：「それはマダムでしょ！ダメだ……。完全に酔ってるわね。」

魔理沙：「酔ってないわよお」といいながら杯をお湯に浮かべ両手でもって霊夢のほつぺたをひっぱりだした。

霊夢：「ひたい、ひたい。ひっぱらはいれ」と言っつて魔理沙の手を退かせた。

霊夢：「でも魔理沙、出るところに出たらっつていつてたけど、それっつてどんなところ？」

魔理沙：「そりゃ……。里の人間たちが集まるお祭りの日とかかな。いい男がいたらやっぱり誘惑したくなるんだぜ。魔女だけにな。魔女っつていうのは魔性の女の略なんだぜ」と霊夢に寄りかかったままその目を見つめる。

霊夢：「なにいつてるのよ。間違いだらけの女の略でしょ。魔理沙は見た目はいいほうだからね。女っばくしたら男は寄ってくるわよね。」

魔理沙：「ああ。来るな。私の色気に負けてだらうな。ナンパされたりもするぜ」

霊夢：「そりゃあれだけ体も育ってるんだからねえ」と先ほどの写真の話蒸し返す。

魔理沙：「その話を思い出させるなよ。とにかく、男は私に魅力を感じるってわけだぜ。全く、もてる女は困るよ」

霊夢：「じゃ、今度一緒にいっていい？お祭り。私もナンパされてみたいから」

魔理沙：「そんなの駄目に決まってるだろ」

霊夢：「なんでよ？」

魔理沙：「霊夢は巫女さんだろ。常に清浄でなきゃ駄目だぜ」

霊夢：「でも、私だって男に興味あるのに」

魔理沙：「駄目駄目。男なんかには渡さないぜ。あなたは私のものですわ霊夢さん」

霊夢：「マリみてっばい感じになってきたわね。」

第十二話

初春とはいえちよつとでも寒くなると冬がぶり返し、ちらほらと雪が降り、その雪が風に舞い幻想境を霞ませる季節。山の奥を流れる川の水がまだ清々と冷たく、手のひらですくって飲むと二日酔いさえ瞬時にさめるほど冷たい季節。そんな寒さの中で熱々の温泉に肩まで浸かり見上げると高い月。時折姿を変える月。そんな月を見上げながら魔理沙は聞いてみる。

魔理沙：「なあ、なんで月がこんな風に見えたりすんだらうな？」

霊夢：「ここは幻想郷と外界の境目。きつちりと分かれているんじゃないかってはざまで揺らいでる。だから幻想郷の月に見えたり、外の世界の月に見えたりするんじゃない？」

魔理沙：「そうかあ」ふーん、といいながら魔理沙は杯をお湯の上に置いた。

二人は空に浮かぶ月をしばらく黙って見る。月の色は移ろい、時折白くなり、時折紅くなる。

こうやって黙って見上げる月もいいものだ。どれほど長い時間が経つたろう。

魔理沙がポツリと言った。

魔理沙：「なんかお前の服みたいだな。白で紅。そう思うだろ？」

霊夢：「そうねえ。私の服みたいよねえ」

ただ月を見上げて、酒を飲む。そうやってぼんやりとしたまま返事をする。生返事になっているが魔理沙は怒らない。魔理沙も酒を飲み、ぼんやりと空を見上げる。二人とも黙って月を見上げる。布団に入って眠りに落ちる前の、あの心地よさ。お湯が布団で岩が枕で俺がお前でお前が俺で。違うか。

二人でぼんやりと空を見る。

魔理沙：「私たちが最初に会ったのっていつだったけ？」なんとなくそんなことを聞きたくなった。

霊夢：「さあ。いつだったかしら。覚えてないわ。魔理沙は覚えてる？」

魔理沙：「私も覚えてない。気がいたら」とそこで息をつく。

霊夢：「私のところに来るようになってたわね」

魔理沙：「霊夢のところに行くようになってたぜ」

と二人とも同時に言った。それは不思議なことでもなんでもない。お互い相手がそういうと判っていた。

二人ともちよつと笑って、出会った頃のことを振り返った。いろんなことがあった。

二人だけの思い出もあれば、幻想郷のいろんな仲間との思い出もある。

お互いがいなかったら随分と退屈だったろうな。

第十三話

そんなこんなで二人で寄り添いながら濛々とした湯気の中、月を見上げていた。

そのとき、温泉からぼこつと音がして、泡が一個浮かび上がった。

魔理沙：「霊夢」と落ち着いた口調で言った。

霊夢：「なに？」

魔理沙：「今のお前のおならだろ？」

霊夢：「私が？してないわよ」

魔理沙：「いいって。私はそういうの全然気にして無いぜ。出るものは出るんだしな」

霊夢：「これって魔理沙がしたんじゃないの？気を使って気付かない振りしてたのに。私はそういうキャラじゃないでしょ。おならするんなら魔理沙のキャラじゃない？」

魔理沙：「そんな風に私を見てるのかよ！つか私じゃないぜ。泡が出たのはこの辺だろ。私はここにいるんだぜ。おしりをこっ、ここにおしりがあるなら私だけだな。ま、誰もいないんだから気にするな。私もしたくなったらするからさ」そういってお酒をくつとあおる。

霊夢：「違う！してないもん！」と真っ赤になって否定する。

魔理沙：「照れなくてもいいんだぜ。誰でもするんだから。まあ、年頃の娘だから人前するのは恥ずかしいと思うのは判るぜ」などと話を進めていく。

霊夢：「違うから！」

そういつている間にもまたほこぼことアワが出てくる。かなりの大きさのものが何個も出てきた。

魔理沙：「うおっ。これは・・・でかいな。でもおならじゃないな・・・」そう言ってちよっと離れる。なにやら危険を感じたようだった。

霊夢：「だから言ったじゃない！でもこれ何なのかしら？」そう言っつて魔理沙の近くに行つて魔理沙にくつつく。

更に泡がぶくぶくとなる。

魔理沙：「お、おい、なんか人の影が浮かび出てきてないか」魔理沙は霊夢を守るように立ち上がる。両手からは小さい星が出て、いつでも攻撃できる準備を整えている。

霊夢：「そういえば・・・」霊夢もいつの間にか手には札を用意している。

ゆっくりと浮かび上がる姿は長い髪をふわふわとさせている。白っぽい服を着ていた。

紫：「ぶはっ」

霊夢：「紫っ！」

紫：「靈夢、こんばんは。あら、魔理沙もひさしぶりねえ」
「そうやって出てきたのは、隙間の妖怪といわれる八雲紫。幻想郷最古の妖怪の一人。あらゆるところに隙間を作り、そこから姿を現すことが出来る幻想郷でも古株の一人。そんな彼女は、ぶぬれの服のまま、にこやかに靈夢の足の間から姿を現し、二人に挨拶をしたのだ。」

第十四話

霊夢：「なんで紫がこんなところにいるのよ。っていうかどこから出てくるのよ！びっくりしたじゃない」胸を隠しながら霊夢が言う。別に見られてもかまわないが反射的に隠しただけだ。

魔理沙：「そうだぜ。今はまだ初春だ。お前が出てくるのは2ヶ月ほど早くないか？こんな寒い時期に冬眠から覚めるってお前・・・」

紫：「そんなに早く起きちゃったのね。なんか眠たいと思った。」「そういつてちょっとあくびをする。」

霊夢：「しかもこんなところから起きだしてくるなんて」

紫：「そうなのよ。私もびっくりしてるところよ。ところでこれって温泉だわよね？」

霊夢：「ええ。ちょっと前急に湧き出してきたの。」

紫：「私がこんなに早く冬眠から目覚めたのは温泉が原因なのかもしないわね。」「そう言っつて肩まで漬かり、温かいわ、と呟いた。」

霊夢：「温泉の暖かさで勘違いしたのね」

紫：「そういうこと。でここが一番暖かいから隙間を作っつて出てきたら温泉だったっつてわけ

ね。だからほら、服がびしょぬね。」「そう言っつて立ち上がった。水を吸っつて紫の体にびつたりとついた服はそのスタイルのいい体をくつきりと浮かび上がらせている。見る人が見たらかなり喜ぶ姿だろ

う。もっとも霊夢には関心の無いことなのだが。

霊夢：「どうするの？まず服を脱いだほうが良いんじゃない？」

紫：「それもそうね。起きて早々顔だけじゃなくて全身洗えるって、なんてお得なのかしら。お得なのよね？」

魔理沙：「お得なんじゃないか？」

紫：「そうよねえ。でもこれって体が重たいのよね。お言葉に甘えて脱がせてもらっわ。」

ずぶぬれのまま温泉からあがり服を脱ぐ。

霊夢：「服はあとでもってくるから」

紫：「じゃ遠慮なく温泉を楽しませてもらっわ」

第十五話

服を脱ぎ終わった紫はゆっくりとお湯に漬かる。

魔理沙：「紫っておっぱいあるな」そういつて紫の胸をもみもみする。

紫は特に嫌がる様子も見せずに熱心に胸を揉む魔理沙をまるで母親のようににこやかに見つめている。

紫：「二人はこれから大きくなるわよ。私なんかはずっと生きているから育つてるだけよ」

霊夢：「大きくなるといいんだけどねえ」と言つて残念な自分の胸をしげしげと見つめる。

魔理沙：「温泉の効能におっぱいが大きくなる、つてのはないのか？」

霊夢：「あるわけないじゃない。そんな効能があつたら誰も牛乳なんて飲まないし、イソフラボンを摂取したりはしないわよ。ていうか、私は結構牛乳飲んだりイソフラとつたりしてるのになんで胸の大きさが変わらないのよ？おかしいと思わない？」霊夢は悔しくてたまらないらしい。これをつけるだけでぐんぐん胸が大きくなる！とかいうような怪しげな通販商品なら諦めがつくが、なにしろちゃんと科学的に裏づけがあるにもかかわらず自分には効果が無いのが悔しくてたまらない。

魔理沙：「そんなことを私に言われてもこまるぜ。でもこの温泉つて靈力がすごく回復する気がするんだが私の気のせいかな？」

霊夢：「私も思ってた。紫は？」

紫：「そうねえ・・・起きたばかりのときって霊力が目覚めてないんだけどこの温泉のせいかしら、なんだか霊力の回復が早い気がするわ。」

霊夢：「へへ。それじゃこの温泉って妖怪を集めるにはちょうどいいのかもしれないわね」

魔理沙：「そりゃいいな。本格的に客集めが出来るってわけだ。」

紫：「虫は明かりに引き寄せられ、私は温泉に引き寄せられる。私は宴会をやりに来たのかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

魔理沙：「どつちなんだよ。しかし宴会かあ。たのしそうだぜ。もうちょっと人数が増えればできるんだけどな」

霊夢：「そんなに宴会がしたい？」

魔理沙：「私は寂しがりなんだぜ？森の奥で一人で暮らしていると人恋しくなるもんだぜ？」

霊夢：「寂しがりやうんぬんじゃなくてただ単なる宴会好きなんですよ・・・仕方ないわね」

そついうと霊夢は笛を一回吹いた。

魔理沙：「急に何してるんだ？」

霊夢：「宴会の告知をしようと思ってね。告知はあの天狗に頼むこ

とにするわ。」

すると、一陣の風が吹き、月明かりの下、一羽の天狗が現れ、空中で止まり温泉を見下ろすのである。彼女の名は、射命丸文。幻想郷の天狗。

第十六話

文は3人がお湯に使っているのを見た。湯に写りこむ月がゆらゆらと揺れている。そしてお酒を飲み長柄3人の美女がのんびりと温泉に浸かっている。

文：「あややや。こんなところに温泉ですか。やっぱり温泉は鄙ひなびた場所にあるのが似合ってますね。幻想郷の中心よりこういう場所がいいですね」

霊夢：「鄙びたは酷いわね。静かな場所、くらいにしておいてよ」

文：「いえいえ。褒めてるんですよ。でもいやだというなら、そうですね。新聞にはそう書いておきましょう。早速美女3人が湯に浸かっているようですし・・・」そういつてカメラを取り捲る。

魔理沙は笑いながらカメラにポーズをとり、霊夢はその後ろに隠れ、紫はすました顔でさも気にも留めていない風を装う。

文：「みんないい顔してますよー。そしてそのリアクション。皆さんの性格が出てますよー。いいねいいねー。その顔。博霊神社に温泉完成！の記事にはこの写真を使わせてもらいますね」

霊夢：「ついでに明日は宴会もやりますから（魔理沙：お！マジで！）みなさんふるって参加ください、って書いて欲しいわね」

と言つ言葉を聞いて文は写真を撮るのをやめてゆっくりと温泉の近くまで降りる。そして霊夢の近くで空中でなぜか正座をして神妙な面持ちになった。

文：「あやややや。宴会ですか。私も参加したいです」

魔理沙：「もちろんおkだぜ。それより射命丸も風呂に入りなよ。暖かいぜ。空中で正座なんてそんな器用なことはやめとけよ」

文は着地する。短めの髪がふわつとなびき、一本歯の下駄がカツン、と心地よい軽い音をたてた。

文：「よつと。いいんですか？」

霊夢：「もちろんよ。ねえ、紫？」

紫：「湯に濡れた天狗の黒髪はすごく魅力的だと思うわ。私も見たいわ」

文：「そこまでいわれると照れちゃいますが・・・それじゃ遠慮なく脱がせてもらいます。えーと、どこに服をおけばいいんですか・・・ああ、そこですね」そう言っ、幾つか置かれているかこの中に服を脱いでいく。

魔理沙は脱衣所の方に向き直る。頭にタオルを乗せ、温泉を囲む岩に体を預けながらじーっと文が服を脱ぐ様子を観察する

魔理沙：「・・・ふん・・・」（思ったより華奢だな。あとは胸もそんなに無いな。あれなら私の方が少しはあるくらいだぜ。全体的にはほっそりしているのはうらやましいぜ。でも霊夢のやせすぎず、太ってない絶妙のプロポーションも魅力的なんだよなあ。紫のボンツ、キュツ、ボン！は私にはどうしようもないけどね）などと考える。

文：「なんですか？」すでに服を脱ぎ終えてタオルで前を隠し温泉に近づきながら尋ねる。

魔理沙：「いや、羽が生えてるなと思ってさ」

文：「これですか」そう言ってパタパタと羽を動かす。

文：「邪魔ならたたみますよん」

魔理沙：「別に邪魔じゃないぜ。早く入れよ」

文：「それでは遠慮なく」

そういつてパタパタとお湯に近づいて入る。

文：「・・・ああ〜っ・・・気持ちいいですね〜」そういつて肩までつかる。

文が満足げな声を上げるのを聞いて霊夢はここで機嫌をとっておこ
うと計算を働かせる。そしてにこやかに文に声をかける。

霊夢：「そうでしょう。ぜひ文の新聞で宣伝してね・・・あっ、お
背中流しましょうか？」

第十七話

文：「あやややや。霊夢さんに背中を流してもらえますか？」

霊夢：「ええ。あなたが迷惑じゃなければね」につこりと微笑む。

文：「迷惑だなんて。うれしいですよ。幻想郷の誇り高い巫女の霊夢さんに洗ってもらえるなんて。なんだか塗れて来ちゃいそうですドキドキする胸の高鳴りに思わずほっぺがあかくなる。」

霊夢：「も〜。文つてば、表現が卑猥よあ。ま、芸術か猥褻かでいくと文の表現は全部芸術だとは思うけどね」そんなことないですよーと文。そう言つてきやつきやつと二人はじゃれ合う

二人のやり取りを聞きながら紫はタオルを目に当ててよよと泣く紫：「なんとといういたわしい行い。寂れた神社になんとか客を引き戻すために必死の接待・・・なんだか泣けてくるわあ」

魔理沙：「そうだな。霊夢、そこまで必死にならなくてもいいぜ。別に寂れてたつてかまわないじゃないか。何か問題でもあるのか」

その二人の言葉を聞くやいなや、肩まで浸かっていた霊夢は勢いよくざばつと立ち上がり、握りこぶしを作り、二人とも何もわかってない！と一喝し、話し出す。

霊夢：「私だつてね、新しい巫女服だつて買いたいし、オフの時に人里に行くときくらいはお洒落していきたいわよ。私がつてる巫女服以外の服が何着あるか知ってる？2着よ。それも春夏用なの。この寒い冬にそんなの着てられないわよ。巫女服もかわいいけど、

普段着もまたかわいいねえなんていわれてみたいじゃない。里の女の子たちがお洒落をしているのをうらやましいなあって見てるのはもう嫌なのよ！飾ってあるトランペット欲しさにウインドウへばりついて見ている黒人の子供状態をいつまでも続けたくないの！それに茶菓子だつてもつと甘くて美味しいものも食べたいの。外の世界には赤福っていうおいしいお茶菓子があるけど、神社に来てくれたお客さんにはそれくらいのお茶菓子を出したいじゃない。ま、もつとも私が一番食べたいだけなんだけどね。でも今みたいなこというなら紫と魔理沙にはそんないい茶菓子は出さないことにするわ。お茶も出涸らして十分ね。・・・とにかくお客さんに来てもらわないとダメなのよ。お守りを買ってもらったり、お賽銭を入れてもらったり、おみくじを何回も引いてもらったり・・・そうやってお金を増やさないと駄目なのよ。お布団だつて今の薄っぺらくて寒いのもりもふかふかのが欲しいのっ！お風呂に入った後裸ですりすりすると肌触りが気持ちよくてうっとりしちゃうくらいの布団も欲しいのっ。深夜に寒さで目が覚めにくいくらいの温かい布団が欲しいの。私と一緒に寝てくれる人がいて暖めてくれるならいいけどそんな人もいないわよ！ええ、どうせ私は未開封の処女よ。一緒に寝てくれるいい人なんていないわ。未開封のまま賞味期限切れになっちゃうんだわ。それでもいい。それでもいいわ。でもあたたかい布団は欲しいの。それじゃないと駄目なのよ。だから文に気分よくなつてもらつてたくさん宣伝してほしいのよ。そしてたくさんお金を手に入れて服を買つたりおいしい茶菓子を買つたり布団を買つたりしたいのよ。そののどこが悪いのよ！！・・・もうっ、寒いからまた浸かるわ！二人が変なこというからおっぱいも丸出してくんな話しちゃったじゃない」もしこの場に銀魂のヅラがいたら、丸出しなどと女の子が口にするものではない、と言っただろうがないのでセーフ。何がセーフかはわからないが。

紫：「うううう・・・かわいいそんな霊夢。なんだかいじらしく見え

るわ。そうだ、佳い人がいないのなら私が一緒に寝てあげましょ
ね」よよよと泣き崩れる

霊夢：「別に同情なんていいわよ。あなたは大妖怪。それに貧乏も
していないから欲しいものは持つてるでしょ。そもそも妖怪だから
人間みたい欲なんてないでしょうけど、私は人間。いろんな欲があ
るんだから」

紫：「そうね。犬が骨を土の中に埋めて隠し集める理由は人間には
わからない。そして私にも人間の欲のことはわからない・・・人間
と犬が同じって言うてるわけじゃないわよ。その行動の理由がわか
らない、っていうことね」

文：「まあ、私は霊夢さんの気持ち、わかりますよ。天狗って言う
のは人間に近い生き物ですからね。わかるからこそ、あくせく働い
たりもするし、だからしたらなんだか悪いことをしている気にも
なったりするし。紫さんはだからと何もしいことは悪いとは思
わないですよね」

紫：「そうね。別に悪いことじゃないわね。退屈だと嫌だけど」

文：「そうですね。人間と妖怪じゃ物事の善悪の基準が違うんで
すから。ってなんでこんな話になってるんでしょうね」

魔理沙：「そうだよ。まとめると、霊夢が文に優しくしたのは愛情
でなく、計算だったってわけだ。で、それを私たちが非難した。で
も霊夢は立ち上がって反論した。その反論の内容は理解できる内容
だ。私も納得したぜ。出廻らしのお茶と、私に出す茶菓子は無いっ
てくだり以外はな」

霊夢：「ふん・・・お前に食わせるタンメンは無え！・・・じゃない、魔理沙に食わせる茶菓子は無いわよ！・・・文、私は計算づくで優しくしたわけじゃないのよ。そりゃちよつとは計算もあつたかもしれないけど、今日みたいに寒い日は温泉を楽しんで欲しいっていう気持ちから優しくしたんだからね」

文は目に涙をためていた。霊夢の話から博霊神社が困窮しているのを知ってしまったのだ。

文：「判つてます。霊夢さん。私、筆力の限りを尽くしてこの温泉を宣伝しますね。そして温かい布団で寝てください」と言いながら霊夢の両手をぎゅっと握り締めた。

霊夢：「文・・・」

文：「霊夢さん・・・」

そう言つて二人はひしと抱き合つたのであつた。嗚咽する文。そしてしてやつたりの表情を隠せない霊夢。Lを騙したときの月のような表情さえ浮かべている。もつとも文からはみえないのだが。

そんな二人の様子を見ながらため息混じりに呟く。

紫：「霊夢もしたたかね。文の心を捕らえちゃつたわ」

魔理沙：「ああ。あいつはああ見えてなかなか現実的だからな。もう何年かしたらあんな感じでしたたかにいい男を捕まえるんだろうな・・・あいつと同じ男を好きにならないようにするぜ。奪い合ひになつたら勝てそうにない。ていうかさ、夜寒いのなら私が一緒に寝てやるぜ。西洋の魔女と東洋の巫女が一緒に寝てる姿なんてなかなかいいと思わないか」

紫：「うん、なかなか風情があっ
ていいわねえ」

第十八話

魔理沙：「そっぴやさ、さつき人間と妖怪は考え方が違っつて言っ
てたろ？でも人間と妖怪、考え方がまったく違っつていうわけでも
ないぜ。たとえば紫はお酒を飲んだり宴会をしたりするのは好きだ
ろ？」

紫：「大好きねえ。毎日やっつてもいいわよ」

魔理沙：「ほらな。私たちも宴会は好きさ。考えることは一緒。毎
日でも宴会をしたい。これなら妖怪とも付き合えるっつてもんだぜ。
共通点だっつてあるわけだ。人間と妖怪を結び付けてくれる偉大なる
飲み物、お酒に乾杯だぜ」

そっぴ言っつて杯を上げる。みんなそれに習っつて杯を上げてゆっくりと
飲み始める。

霊夢：「それじゃそろそろ体も温まっつてきたことだしみんないつた
ん体を洗わない？実はこんなものを手に入れたのよ」そっぴ言っつて岩
の近くにおいてある洗面用具を見せる。人間の世界になら普通にあ
る洗面用具だ。

紫：「不思議なものねえ。これはなんなの？」そっぴ言っつて手に取っ
て見る。

魔理沙：「お、私は知っつてるぜ。久しぶりに見たなあ」

文：「あやややや。私は初めて見ますねえ。これっつてもしかして外
の世界のものですか？」

霊夢：「その通りよ。石鹸と、シャンプーとリンスっていうものね。これをこのタオルというものにつけて体をこすると体が凄くきれいになるのよ。みんなの分あるからやってみない？」

紫：「面白そうねえ。外の世界の人たちってみんなこんなことをしてるの？」

霊夢：「そうね」

魔理沙：「じゃあ早速やるか。みんな外へ出よう」そう言って外に出る。それから全員一列にならんで、木で出来た小さい椅子に全員座る。

魔理沙：「お前こんなものまで用意してたのかよ・・・本気で温泉宿でも開くつもりじゃないだろうな」

霊夢：「気分よ、気分。本格的にやったほうが旅行で来ました、って感じがするでしょ。お手軽に旅気分を味わうのにはこういうのも大事なのよ」

それぞれの背中を洗う。

魔理沙は文の背中を洗う。魔法使いの人間が天狗の背中を洗ってもいいじゃない。

文は紫を洗う。天狗が大妖怪の背中を洗って何か悪いんですか？

紫は霊夢を。大妖怪が巫女さんの背中を洗う・・・生唾ものですねえ

それが終わったあとは反対向きに洗おうと決めてからそれぞれの背中を洗い出す。

キャツキャツいいながら洗っていたが、一人だけ反応が過敏な種族が・・・

誰かと思いきや天狗である。耳を澄ましてみるとどう考えても背中を洗ってもらっているとは

思えない。

文：「んふっ、ああっ・・・はあはあ・・・これ凄く気持ちいいですね・・・ううん・・・」

時々ピクンツ、と体を跳ねさせながら文は言う。全身の力もすっかり抜けている感じだ。

文の背中を洗うのは魔理沙だ。そんな反応をされたら誰でも引く。が魔理沙はそんな反応をみ

てますます面白がる。

第十九話

魔理沙：「おまえなあ・・・そんなセクシーな声出すんじゃないよ」と魔理沙は文に言う。なんだか悪いことしてる気分になるじゃないか。

文：「ええ？皆さん気持ちよくないですか？私は特にこの羽の付け根のところを洗われると気持ちよくて・・・ふあっ・・・」と言う。なんとか声を上げないようにしているのか、思わず親指を口に持つていつて噛み締める姿が色っぽい感じだ。羽の先のほうは神経は無く、羽毛なので別になんとも無いのだが、羽の付け根は特に神経が集まっているところのようで魔理沙がごしごしするたびにあんっ、とかふあっとか、くうううん、という嬌声を上げるようだった。

紫：「ちょっと文さん、アンアン言っていないで手を休めずに私の背中も洗ってくださいな。自分ばかり気持ちよくなつてずるいわ」

文：「すいません。あの魔理沙さん、その辺はほどほどに洗つてもらったら結構ですので・・・でないと紫さんの背中を洗うのに集中できないのもうちよつと下のほうをお願いしていいでしょうか・・・はうっ・・・」と言ってだんだん内股になり、もじもじし始める。これは・・・やばいんじゃないのか？

魔理沙：「わかったぜ。なるべくここは洗わないほうがいいんだな。」

文：「そうですね・・・人間にはわからないでしょうけど羽の根元は太ももの内側とか、わきをくすぐられるみたいな感じなんですよ。それをきいてなるほど、と魔理沙は頷く。そりゃ声が出るわけだ。」

紫：「私は声はでないですがやっぱり人に背中を洗ってもらったって、凄くきもちいいですね。ああ、文さん、上手ですねえ。そういえば冬眠してたのでお風呂もずっと入ってなかったわ」

霊夢：「それならさぞかし気持ちいいでしょうねえ・・・きもちひいよ、らめえええ〜って感じ?」

紫：「人間はそんな風に言うの?それならそうね、らめえええ〜って感じね」うんうんとうなずきながら言う。ここで霊夢の誘導により間違つてらめえの使い方を覚えてしまった紫は外の世界に行ったときにこの言葉を人間に対して乱発してしまい、思わぬ誤解を招いてしまうことになるのだが、それはまた別の話。そのうち語る機会がくるかもしれない。

紫に背中を洗ってもらっている霊夢も気持ちよさそうだ。人に背中を洗ってもらうとむずがゆくなる場所が必ず出てくる。そこをこすってもらうのはまさに天国なわけだが、今まさに幻想郷の博霊神社の裏手のこの温泉は天国であった。

霊夢：「紫、もうちょっと強く洗っていいから・・・そうそうそんな感じ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8174f/>

幻想郷温泉譚

2010年10月23日01時16分発行